# 『アブサロム、アブサロム！』における語りの重層性

植　野　達　郎

『アブサロム、アブサロム！』はローザ・コールフィールド、コンプソン氏、クェンティン、シュリーヴおよび客観的な語り手の語りで成り立っている。それぞれの語り手が語る事柄は客観的事実に基づくというよりは、各自の推測、憶測、あるいは事柄の捏造までをも含んでいる。それゆえブルックスが「サトペンと彼の子供たちについてわかること」(1) として、事実や出来事と最終的な典拠、そして推測された事柄と推測者の一覧表を作成していることは十分に意味があることである。しかし、ここで改めて問うべきはそれぞれの語り手が語るサトペン家にまつわる話の信憑性ではなく、何故彼らが推測を交え、さらには事柄を捏造してまで語るのかという語りの動機である。

一人称の語り手がある事柄を語る時、その話を聞いたり、読んだりする者は、まずはその語り手の視点に立って話を受け取る。換言すれば、語り手の立場に立つことを強いられるのである。そこには語り手の思いや偏見、あるいは好き嫌いの感情など語り手の私情が入り混じっている。さらに、語り手は自分が語る話が真実だと思って語っている。たとえ客観的には虚実が定かではない話であっても、ひとまずは語り手が語る話を、そのまま受け取らざるを得ない。それに加えて語り手は語りたくない事柄に触れることを避けることもある。この時、その話の聞き手や読み手は語り手の心情に思いを馳せて、語ることを拒む理由を考えたり、いったい何があったのかと想像をたくましくするのである。

『アブサロム、アブサロム！』におけるローザ、コンプソン氏、クェン

ティン、シュリーヴの語りも例外ではない。ローザはクェンティンを聞き手として、コンプソン氏もクェンティンを聞き手として、シュリーヴとクェンティンは二人が語り手と聞き手となって話をする。彼らが語る話はサトペン家にまつわる話である。サトペン家にまつわる話といっても語り手によって重点の置きどころが違うことは言うまでもない。

『アブサロム、アブサロム！』はローザがクェンティンに語る場面から始まっている。ノーマン・W・ジョーンズは「ローザは話を聞いてもらうのに何故クェンティンを選んだのか」[(2)] という問を発しているが、ローザ自身がクェンティンに来てもらったのは「南部の多くの紳士や淑女が行っているようにあなたももしかしたら筆で身を立てるようになり、もしかしたらいつの日かこの話を思い出し、書くことになるのでしょう」[(3)] と述べているように、クェンティンはローザが自分を呼んだのは、「本当はこの話を人に語り伝えてもらいたいからなのだ」(7) と考えている。またコンプソン氏はクェンティンの祖父であるコンプソン将軍がトマス・サトペンの唯一の友人と言える人物であり、コンプソン将軍の友誼がなければローザの人生は変わっていたはずであり、それがクェンティンを選んだ理由であると言う。ローザがクェンティンを選んだ理由が何であれ、彼女がクェンティンにサトペンの話をし、夜になってから一緒にサトペン屋敷に赴いたことは確かである。しかも、サトペン屋敷では想像もしていなかった人物、病床に臥しているヘンリー・サトペンと相見えたのである。

ローザがクェンティンを選んだ理由の一つとして、サトペンにまつわる話を語ることによってクェンティンが南部の一員としての自己を認識することを意識させられたことに求めることができる。彼がローザから聞かされた話のほとんどは「すでに知っていた」(26) 話ではあるのだが、ローザの語り口には彼女の色がついている。

> この悪魔は――その名前はサトペンだった――（サトペン大佐）――そうサトペン大佐だ。その男はどこからともなく、何の前触れもなしに、見たこともない黒人の一団を従え、この土地に現れ農園を作った――（力

ずくで農園を引き裂いて作ったとミス・コールドフィールド）――そうだ、力ずくで農園を引き裂いて作った…そして死んだ。誰からも悔やまれずにとミス・ローザ・コールドフィールド――（彼女を除いては）。そうだ、彼女を除いては。（それとクェンティン・コンプソンを除いては）。そうだ。それとクェンティン・コンプソンを除いては。（5）

トマス・サトペンを「悪魔」と称し、「力ずくで」農園を作り上げ、彼の死を悔やむ者としてはローザとクェンティンしかいないと決めつける。こうした悪の権化のようなサトペンは、ローザにとっては真実の姿であり、だからこそクェンティンはシュリーヴとともにハーバード大学の寮の一室でサトペン家の物語を再構築するに際して、悪魔のようなサトペン像を引き継ぐのである。ローザがサトペンを悪魔と規定するのは彼女なりの理由があってのことなのだろうが、その理由が明確に述べられることはない。サトペンからの結婚の申し出を受け入れはしたものの結局は彼との結婚を拒否して実家に戻ったローザは、その後43年間、サトペンを憎み続けるのである。二人の間に何があったのか、ローザが語ることはない。クェンティンとシュリーヴは、サトペンが白人の息子を持つことを人生の関心事と想定しているので、南北戦争から戻ってきたサトペンに「試しに子供を産んでみて男の子で生きていれば、結婚しようと持ちかけ」（290）られたローザは、そのことを人生最大の侮辱と見なし、サトペンの屋敷を飛び出したと想像する。

サトペンがローザに何を語ったのかは、当事者の二人が語らない以上、推測の域を出ない。とするならば、ここで考えるべきことはローザが亡くなった姉エレンの夫、40歳近くも年上であるサトペンとの結婚を拒み、実家に帰るという行動を取ったこと、さらにはその後43年間もの間、サトペンを悪魔として憎み続け、そのイメージをクェンティンに伝えたという事実が何を語っているかであろう。というのも、サトペンの死を現在、悔やんでいるのはローザとクェンティンだけであり、しかも二人は悪魔としてのサトペンのイメージを共有しているのである。それゆえ2章から4章にか

けて、クェンティンがローザの家から一度帰宅し、再び訪ねるまでの間、父親のコンプソン氏がクェンティンにサトペンにまつわる話をするのは、一つにはサトペンのジェファソンでの受け取られ方を示すとともに、サトペンの唯一の友人であったコンプソン将軍が知るサトペン像を提示することで、ローザのサトペン像を補正することが企図されている。ローザの話によって提示されるサトペンのイメージに対し、町の人々が抱く、いわば公的なサトペン像が示される。それに加えてサトペン家の出来事に対するコンプソン氏特有の見方が披露されるのである。

ローザがサトペンに強い関心を寄せるのに対し、コンプソン氏はヘンリーの出奔にまつわるヘンリーとボンとの関係に興味を抱く。ボンがヘンリーに連れられてサトペン屋敷に来た時に、母親エレンは娘のジュディスとボンとの結婚を決めこみ、町の人々にボンとジュディスの婚約を話していた。しかし、ヘンリーがボンを連れてきた二度目のクリスマスの前日にサトペンはヘンリーと激しい口論をし、ヘンリーはボンとともに屋敷を後にしたとサトペン家の黒人から情報が伝えられる。父親と息子の間に何があったのかは、両者が語ることがないので明らかではないが、サトペンとヘンリーの間で交わされた話が原因でヘンリーは生得権を放棄して家を飛び出し、やがてボンを殺害するに至ったことは間違いない。二人の間で交わされた話をめぐって、またボンとヘンリーについてコンプソン氏はクェンティンに自説を披露する。

コンプソン氏はヘンリーがボンをサトペン屋敷に連れてきたのは、ヘンリーがボンを「愛する」(93) と同時にジュディスを愛していたからだと考えている。ヘンリーとジュディスの間には普通の兄妹の関係に止まらないものがあった。「町の人々も知っていたのだが、ヘンリーとジュディスの関係は昔からある兄と妹の忠実さよりももっと親密なものであり…お互いに死の危険を冒す精鋭部隊の二人の士官候補生の間の激しい、個人的な思いにとらわれないライバル関係に似ていた」(80) というのだ。このヘンリーとジュディスの関係はクェンティンとキャディに見られるような近親相姦ではなく、心の奥深いところで相手を十分に理解していることをうかがわ

せている。特にジュディスは幼少のころのサトペンと黒人の戦いをクライティとともに平然と見詰めていたことを考えると、ヘンリーに万一の事があれば自己の危険を顧みることなく大胆な行動を取ることが想定されるのである。

それに対してヘンリーはボンに対する思慕の念に駆られているとコンプソン氏は考える。クリスマス休暇にボンを屋敷に連れてきたヘンリーは、ボンとともに過ごす時間を持つことができることを楽しんでいた。さらに翌年の夏休みにもボンを伴って帰郷したヘンリーであったが、母親のエレンがボンをジュディスの結婚相手と見なしてしまう。これによってヘンリーはボンに対する立ち位置が危ういものとなり、コンプソン氏はヘンリーの屈折した心情を思い描く。

> 妹の処女性を義理の兄によって奪おうとするのだが、その男は、もし自分がその妹の恋人に、夫になることができるのであれば、自分が変身したいと思っている男であり、またもしも自分が変身して妹に、愛人に、花嫁になることができるのであれば、その人に奪われたいと、自分の略奪者に選びたいと思っている男だった。(99)

このようにヘンリーから寄せられる愛情を、ボンは「女には決して生じないが、若者が他の若者や大人の男に捧げる、あの完璧で自分を省みることがない献身の対象に自分自身がなっていることを、一年半に渡って目にしてきた」(110) と受け止め、ヘンリーが同化の対象としてボンを見てきたとコンプソン氏は想像する。それに付け加えてボンが愛したのはジュディスでもヘンリーでもなく、「二人が体現する生活、存在だったのだろう。なぜならあの単調で田舎じみた時代から取り残された土地にどのような平安を見たかは誰にもわからないから」(111) と、ボンの関心を人間から精神的癒しへと向けてしまう。コンプソン氏にとってのボンは快楽を味わい尽くした人物であり、精神的な平穏を求める人物である。このようなボンにコンプソン氏が「興味を惹かれた」(95) のは、彼自身がヘンリー同様にボンの

ような人物に同化を求めて描き出したからではないのか。

コンプソン氏はクェンティンにヘンリー、ボン、そしてジュディスの関係を考察し、ヘンリーがボンを殺害した理由をボンには八分の一黒人の妻と十六分の一黒人の息子がいることだと考える。コンプソン氏は想像をたくましくして三人の関係を思い描くのであるが、確信に到達したという感触を持てないでいる。「そうだ、ジュディス、ボン、ヘンリー、サトペン。みんないる。彼らはそこにいるのだが、何かが欠けている」(103) と、あたかも今までクェンティンに述べてきたサトペン家の物語を否定するかのような言葉を発する。何が欠けているのかについて、コンプソン氏には見当がつかない。その欠けているものを埋めるべくクェンティンとシュリーヴはサトペン家の物語を再構成するのである。

クェンティンとシュリーヴはコンプソン将軍がサトペンから聞いたというハイチでのサトペンの経歴に注目する。サトペンは働いていた砂糖農園で使用人たちの反乱が生じた際に、その反乱を鎮め、農園主から娘との結婚を勧められ結婚した。子供が生まれた時に自分の人生の構想に合わないと考え、妻子に財産を渡してジェファソンにやってきたのである。しかし、ヘンリーが連れてきて、娘のジュディスの結婚相手とエレンが思い込んだチャールズ・ボンはハイチに残してきた子供なので、ジュディスとは結婚できないと、クェンティンはコンプソン氏に教えたというのである (271)。コンプソン氏には想像もできなかった事柄ではあるにしても、ボンがジュディスと結婚することは近親相姦となり、二人の結婚をサトペンが許さなかった理由としては納得できるものである。

クェンティンがヘンリーに、そしてシュリーヴがボンに一体化して、二人が四人になり、また二人になって話を進めていく。近親相姦の例を歴史に求め、「だけど王たちも行ったのです。伯爵でさえも。妹と結婚したジョン何某というロレーヌの伯爵がいました。法王が彼を破門したのですが、それによって傷つくことはなかったのです。二人はそれでも夫婦だったのです」(349) と、ヘンリーに言わせている。それゆえクェンティンとシュリーヴは、ヘンリーがボンを殺害する動機として近親相姦は十分ではない

ことに同意する。その結果、クェンティンはボンの出生に関し、新たな情報を持ち出す。南北戦争中にサトペンがヘンリーを呼び出して、「ヘンリー、彼は彼女とは結婚してはならないのだ。彼の母親の父親が、彼女の母親はスペイン系の女性だと私に語った。私は彼を信じた。だが、彼が生まれた後になって分かったのだが、彼の母親には黒人の血が混じっていたのだ」（361）と話したことを紹介し、それまで誰一人想像もしなかった情報を持ち出したのである。ヘンリーがボンを殺害した理由として、それまで積み上げてきたコンプソン氏の重婚説、クェンティンとシュリーヴが想定した近親相姦説に加えて、クェンティンは新たに黒人と白人の結婚説を持ち出し、「君が堪えることができないのは近親相姦ではなく、黒人と白人の結婚というわけだ」（363）と、ボンに言わせている。この情報はヘンリーがボンを殺害する理由を説明する「劇的な仕掛け、決定的要因」であり、まさに「人種はそれ以外のものでは説明できないものを説明してしまう」[(4)] のである。

だが、何故クェンティンは物語の終わり近くになって人種を持ち出したのだろうか。『アブサロム、アブサロム！』はローザがクェンティンにサトペン屋敷への同行を頼むにあたって、サトペンにまつわる話をしたことから始まった。屋敷へ赴いた二人が遭遇したのが、誰あろう病床に臥しているヘンリーであった。クェンティンはヘンリーと言葉を交わすのだが、シュリーヴに、そして読者に明かされるのは、あなたは誰なのか？いつからいるのか？何故屋敷にいるのか？という問いかけと、それに対する答えだけである [(5)]。ローザとヘンリーの間で、そしてクェンティンとヘンリーの間でどのような会話がなされたにせよ、ヘンリーのボン殺害の動機は人種という南部の特殊性に取り込まれてしまう。

クェンティンと積み上げてきたサトペンにまつわる話は、結局は人種が原因でサトペンの人生の構想が崩れたという南部の特殊性をシュリーヴが受け入れることで一応の完結をみる。しかし南部の特殊性とは何なのかを、シュリーヴは理解できないことを率直に吐露する。

僕はできれば理解したいのだが、うまく言うことができない。それは

> 僕の国の人たちは持っていないものだからだ。あるいは持っていたとしても、ずっと昔に海の彼方で起こったことなので、今では毎日目にして思い出すこともない。僕たちは敗北した祖父たちや自由になった奴隷たち（それとも僕は逆に理解していて、自由になったのは君たちで、負けたのは黒人だったのだろうか）、そして居間のテーブルの銃弾とか、いつでも決して忘れるなと思い出させるものに囲まれて暮らしてはいない。いったい何なのだ。君たちが空気のように取り囲まれて生きて呼吸しているものとは。（368）

クェンティンは人種を持ち出すことでシュリーヴを納得させることに成功した。しかしシュリーヴは「空気のように取り囲まれて生きて呼吸しているものは何なのだ」と問いかけることで、観念的には理解できても実感としては感じ取ることができない南部の特殊性を改めて問題にするのである。

ヘンリーのボン殺害についての説明を完結させたクェンティンはベッドに横になって身体が温まってきたのにもかかわらず、全身が激しく、抑えることができないほど震えだす。このクェンティンの激しい震えに対し、「ヘンリーとボンの物語を語ることが完結したことに対するクェンティンのオルガスムに達する反応がわれわれに思い出させることは、素晴らしい語りは素晴らしいセックスのようなものである」[(6)] と考える批評家もいるが、激しい震えが収まった後でシュリーヴが南部を憎悪する理由をクェンティンに問うていることを考えると、この震えは物語をシュリーヴとともに完結させたことを寿ぐエクスタシーというものではないであろう。クェンティンが一人悦に入っているというよりは、南部の特殊性である人種を流用することで、ヘンリーとボンの物語からその個別性を簒奪することに気づいたクェンティンが、シュリーヴを誘導して作り上げてきた物語に対する後悔の念が激しい身体の震えとなって顕在化したのではないだろうか。では人種に収斂するのではないとしたら、サトペン家をめぐる物語とはどのようなものなのだろうか。

「概して『アブサロム』やフォークナーにおいて、人種はセクシュアリティやジェンダーという本当に重大な問題に対するマスクであり、」[7] ボンとヘンリーの間にはホモセクシュアルな関係があると、ポークは示唆している。人種に収斂させるのではなく、ヘンリーとボンにはホモセクシュアルな関係があるとクェンティンが理解していたとするならば、コンプソン氏が言うところの「何かが欠けている」状況も納得がいくだけでなく、ジュディスがクェンティンの祖母に手紙を渡したことも説明がつく。

コンプソン氏はジュディスがクェンティンの祖母に渡したボンからの手紙を前にして、「四年間の隔たりを経て思いもかけず届いたに違いないこの手紙を手元に置き、そしてこの手紙を見知らぬ人に渡す価値があると考えた。その人が取っておくにせよ捨てるにせよ、読むにしろ読まないにしろ、彼女が話していた、われわれ皆が運命づけられている忘却という無表情な顔にあのかき傷を、あの消えることのない印をつけようとした」(132) と、忘却に沈み込み、忘れ去られないためにジュディスはクェンティンの祖母に手紙を渡したと考えた。しかし、ジュディスのこの行動はいかにも不自然である。他にも手紙が何通か届いていたとコンプソン氏は想像しているが、この手紙が「人に見せた唯一の手紙」(97) であることを考えると、この手紙は忘却を免れるというよりは、自分を愛した人がいることの証拠として渡したのではないだろうか。

しかしその手紙には奇妙な点がある。「日付も書き出しの挨拶も差出人の署名もなかった」(133) のである。このことが示していることは、「この手紙の書き手は受取人を愛している」[8] ということである。しかし、その受取人がジュディスであるとは限らず、手紙が届けられた先がジュディスだっただけという可能性はないのだろうか。書き出しの挨拶も差出人の署名もない手紙とは、差出人と受取人がかなり親密な関係であることを示している。さらに言えば、差出人の素性が受取人以外に知られることが憚られているからではないのか。

「この手紙が死者の声であるのは言うまでもなく、敗残者のものだと言っても僕たちのどちらをも侮辱することはないことをあなたもおわかりで

しょう」(133) という書き出しに続いて、敗残兵である南軍の兵士たちが、無防備な従軍商人の馬車十台を略奪して北軍の箱を手に入れたのだが、中に入っていたのはストーブの磨き粉であったという言葉にすることができないほどの皮肉な状況が述べられている。せっかく手に入れた北軍の物資が、空腹に苦しみ、衣類や靴にも事欠く状況にある南軍の兵士にとって何の意味も持たないストーブの磨き粉であったことに、他者に向けることができない激しい怒りと絶望を覚えるのであった。それゆえ「僕たち」とは、このような遣る瀬無さや空虚感という敗残者意識を共有する南軍の兵士を指しているのではないのか。戦場にいる南軍兵士にとって実質的には無用な物でしかない磨き粉を使って書かれた、「優しく、シニカルで、気まぐれで、救いがたいほど悲観的」(132-33) なこの手紙は、悲惨な状況に置かれている読み手に対する配慮が滲み出ている。この手紙の読み手と書き手の間に「揺らぐことのない、根源的な理解」[(9)] が生じているのは、南軍兵士としての共通認識が介在しているからである。そのような共通認識がボンとジュディスの間に存在していると想像することは難しい。とするならば手紙の書き手はボンであることは間違いないとしても、この手紙の受け取り手として考えうるのはヘンリーしかいないであろう。そうだとするならば、ヘンリーはボンの愛情をしっかりと受け止めた上で、その手紙をジュディスに渡した。そのことによって、いわば中間項を省くことによって、書き手のボンの思いはジュディスに向けられたものであるという解釈を成り立たせているのである。

ジュディスがこの手紙を第三者に渡したことには何か重要な意図が隠されている。それは持ち主であるジュディスの身に異変が起きることが予想される場合か、第三者の目に触れることにより特別な価値が生まれる場合であろう。クェンティンの祖母が手紙を託された時にジュディスが自殺するのではないかと危惧の念を抱いたことは当然の反応である。しかしジュディスは自殺を否定した。とするならば、手紙を他者に渡したことはボンとの婚約が誰の目にも明らかであることを表明したかったからではないのか。それにより、ヘンリーがボンを殺害したのは、ボンとジュディスの結

婚を阻止するためであり、阻止しなければならなかった結婚にはどのような理由があったのかに人々の視線が向けられることになる。

ジュディスがボンからの手紙を第三者に渡したこの行動は何を目指したものなのだろうか。ヘンリーが屋敷に連れてきたボンを見て、エレンはボンとジュディスとの婚約を思い描いたが、ジュディスはヘンリーとボンとの親密さを感じたのではないだろうか。コンプソン氏はボンとジュディスの間には「婚約はなかったし、求婚さえもなかった」(101) と考えているように、ジュディスは「空虚な形、空っぽの器にすぎ」(123)なかったのだ。ジュディスがボンの関心の対象ではなかったことは、ヘンリーがボンをクリスマス休暇や夏休みに連れてきても、その間、ジュディスとボンが二人だけで言葉を交わした時間はおよそ12時間であるとコンプソン氏が見積もっていることからも見て取ることができる。それ以外の時間をボンはヘンリーと過ごしていたのだ。とするならば、ヘンリーとボンの間には通常の男同士の友情を超えたものがあるという感触をジュディスが抱いたことは十分ありうるだろう。口に出すことができないヘンリーとボンの関係を町の人々の目から逸らすためにジュディスは一世一代の行動に出たのである。

クェンティンがシュリーヴに語ってきたサトペン家の物語、すなわち南部の物語とは近親相姦とか黒人と白人の結婚という、シュリーヴにとってはおぞましいと思えるものであった。それゆえクェンティンから南部についての物語を聞き、彼とともに再構築してきたシュリーヴは、「南部か。まったく南部というところは。君たち南部の人たちが自分たちの死後、何年も何年も何年も生きるというのは不思議ではないね」(384) と、南部の人間は死後も現在の人々に影響を与え続けることを指摘する。「そういうわけでトム爺さんを厄介払いするのにチャールズ・ボンと彼の母親が必要だったし、ジュディスを厄介払いするのにチャールズ・ボンと八分の一黒人が、そしてヘンリーを厄介払いするのにチャールズ・ボンとクライティが、そしてチャールズ・ボンを厄介払いするのにチャールズ・ボンの母親とチャールズ・ボンの祖母が必要だった。一人のサトペンを厄介払いするのに二人の黒人が必要なんだね」(385) と、人種が時間と空間を超えて影響を及ぼすこ

とが南部の特殊性だとシュリーヴは認識する。

さらにサトペンの血を引く黒人、ジム・ボンドが生き延びていることを確認した上で、「ジム・ボンドのような者たちが西半球を征服し…北極や南極へと展開するにつれウサギや鳥のように白くなるのだ」(385) と、人種にこだわりを見せている。というよりは、黒人のジム・ボンドのような者がやがては白くなるという認識を示すことで、クェンティンが人種を持ち出すことによってサトペン家の物語を完結させたことに対して根源的な異議申し立てをしているのではないか。この認識に基づいてシュリーヴはクェンティンに「君は何故南部を憎むのだい」と問いかける。

クェンティンが南部を憎んでいるとシュリーヴに思わせるものが何かしらあったからこそこの問い掛けがなされたのであろう。しかしクェンティンはシュリーヴの問い掛けを予期していたかのように、「直ちに、即座に、間髪を容れずに」(386) 南部を憎んではいないと答える。この最後のクェンティンの言動は何を物語っているのだろうか。ヘンリーのボン殺害の理由として人種を持ち出したクェンティンだったのだが、「人種は鍵となる関心事として近親相姦に取って代わる」[(10)] とポークが述べているように、人種は重婚や近親相姦よりも説得力を持ってしまうのである。

シュリーヴに南部の奥深さをうかがわせる出来事を語ってきたクェンティンは、最後に人種という切り札を切ることによって、人種こそが南部を南部たらしめている事柄であり、人種以外の問題は表面的には姿を消してしまうことを伝えたのである。シュリーヴはボンとジュディスが結婚できない理由として人種が原因であることを納得したであろう。しかし人種を持ち出すことによって、クェンティンが本来気にかけていたヘンリーとボンとの同性愛的関係は表面化することはない。逆に言えば、二人が同性愛の関係であることを隠蔽するためにクェンティンは人種を持ち出したのではないだろうか。

とするならば、シュリーヴが指摘したクェンティンが抱いている南部に対する憎しみとは、人種問題を憎むだけでなく、ヘンリーとボンの間にあった豊かな情愛をなかったものとしてしまった自責の念に駆られていたから

ではないのか。『アブサロム、アブサロム！』は「クェンティンが愛する土地の醜悪な特性を憎む物語でもある」[11] というフォークナーの言葉が示すように、南部そのものに対する憎しみというよりは、南部に対する愛情と、南部が抱え込んでいる人種問題を憎む物語であるとともに、そうした問題を抱え込む南部に対する愛情と憎悪を表出するクェンティンの物語なのである。

## 注

1. Cleanth Brooks, *William Faulkner : The Yoknapatawpha County*, Yale University Press, 1963. pp.429-436.
2. Norman W. Jones, “Coming Out through History’s Hidden Love Letters in *Absalom, Absalom!*”, *American Literature*, volume 76, Number 2, June 2004. p.343.
3. William Faulkner, *Absalom, Absalom!: The Corrected Text*, Modern Library, 2012. p. 6.　以下の引用はこの版により、頁数は本文中に記した。
4. Joseph R. Urgo and Noel Polk, *Reading Faulkner: Absalom, Absalom!*, University Press of Mississippi, 2010. p.188.
5. ブルックスは前掲書で「クェンティンがヘンリーと話す時間は10分間だっただろう――しかし二人の会話はもっと長かったかもしれない…ヘンリーがチャールズ・ボンの出自に関する情報をミス・ローザに伝え（ローザは家に帰る馬車の中でクェンティンに伝え）るか、直接クェンティンに伝える時間があると考える人もいるだろう」(441) と述べている。もちろん可能性とすれば考えることができるだろうが、そもそもヘンリーがローザに、あるいはクェンティンにボンを殺害した理由を打ち明ける必然性はどこにあるのだろうか。
6. John N. Duvall, *Faulkner’s Marginal Couple*. The University of Texas Press, 1990. p.115.
7. Noel Polk, *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*, University Press of Mississippi, 1996. p.139.
8. Urgo and Polk, p.54.
9. Elisabeth Muhlenfeld, “We have waited long enough” in Elisabeth Muhlenfeld, ed., *William Faulkner’s* Absalom, Absalom!: *A Critical Casebook*. Garland Publishing Inc., 1984. p.180.
10. Polk, p.138.

11. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner eds., *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*. University Press of Virginia, 1977. p.71.